

---

# TIGER & BARNABY

久保田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

TIGER & BARNABY

### 【NEXT】

N5406V

### 【作者名】

久保田

### 【あらすじ】

大都市・シユテルンビルトは、その能力を駆使して、街の平和を守るNEXT「スーパーヒーロー」が存在する。

彼らの活躍ぶりは専用の特別番組「HERO-TV」で中継され、平和を守る傍ら、その年の「キングオブヒーロー」の座を巡るランキング争いを続けていた。

そんなTIGER & BUNNYでのiffストーリー。  
小さく改変していきます。

Arcadia様に投稿も投稿しています。

## 一話『終わりも始めも良くはない』 前編（前書き）

注・作中ではスポンサーが架空の会社になっています。  
あと一話後編まではアニメと大して変わっておりません……。

## 一話『終わりも始めも良くはない』 前編

積層都市シユテルンビルトは三層に分かれている。

最上層の「ゴールドステージ」。

中層の「シルバーステージ」。

最下層の「ブロンズステージ」。

多重立体型都市であるこの街は、計画的に建設され、世界でも類を見ない設計。

その繁栄は、街並みを見るだけでもよくわかるだろう。

高層ビルが立ち並び、消える事の無い光が灯り、夜の闇をあつて無き物にする。

しかし、人類の技術の粋を集めたシユテルンビルトでも、人の欲望は全て受け止められない。

今夜もまた、自らの欲望を安易に叶えようと、愚かな犯罪に手を染める者達が現れる。

しかし、

「あ、兄い……！ もう逃げきれねえよ……」

「馬鹿やうつ、まだ諦めんな！」

「あ、やべえ！」

闇ある所、光あり。

犯罪者達の魔の手から、シユテルンビルトの善良な市民を守るHERO達がいた！

『さあ、今宵も始まりましたHERO-TV！ 今日の犯罪者は銀行強盗未遂で逃亡中の三人組だあ！』

ヘリのサーチライトが、シルバーステージのハイウェイの上を、必死に運転する黒ずくめの男達を照らし出す。

RPGや、マシンガンを装備している。

車はそこいらから盗んだ黄色のスポーツカー。

運転手とは違い、フルスロットルで走れるのが嬉しいのか、ご機嫌なサウンドを響かせて爆走中。

すでにハイウェイの封鎖は終わり、邪魔な車は一台も走っていない。

ヘリに乗ったカメラマンからの映像は、すでに生放送でシユテルンビルト全域に放送されている。

ある者はビルに設置されている巨大スクリーンで、ある者は我が家で、ある者はバーで。

老若男女、人種、国籍を問わず、手に汗握り、テレビに釘付けだ。警察とのカーチェイスがお望みか？

そんなものはNO。

そんなありふれたイベントは、もううんざりだ。

それより、もっとスリリングでエキサイティングな物を、シユテルンビルトの市民達は知っている。

爆走するスポーツカーの行く手を阻むは、一人の人影。

ノンストップで突っ走るスポーツカーは、すでに300kmオーバー。

その前に立つなど、正気の沙汰ではないだろう。

「兄い！？」

「くそつ、構うこたねえ！ ぶちかませ！」

スポーツカーのアクセルを、床に叩き付ける勢いで踏み込んだ。

彼らの正面に立つ人影。

いや、人影というのは相応しくない。

人の肩にドリルは付いていない。

人の頭に角は生えていない。

緑の装甲に覆われたボディは、どこもかしこも、ひたすらごつい。軟弱さの欠片も感じられないその姿。

加速するスポーツカーに対して、彼は少し腰を落として両手を広げてみせた。

いくら装甲があるからと言って、正気を疑うような行為だ。

多少の装甲があろうと、一個の弾丸となつたスポーツカーを止められる人間はない。

そう、

ただの人間ならば、だ。

『おおつと、最初に現れたのは、「西海岸の猛牛戦車」！ ロックバイソンだああああ！ 激しくクラアアアツシユ！ 真つ正面から車を受け止めた彼は、果たして無事なのでしょうか！？』

白い煙が濛々と立ち込める中、彼はいた。

300kmオーバーの衝撃に小揺るぎもせず、その太い両の腕で、スポーツカーのバンパーをしっかりと掴み、空に掲げている姿は、まるで獲物を掲げる戦士のようだ。

NEXTと呼ばれる特殊能力者が現れてから、四十五年。  
NEXTを生かし、特殊スーツを纏つたHERO達は日夜、悪と戦い続けるのだ！

カメラがスポーツカーを掲げるロックバイソンに、ズームする。

お茶の間に映し出されるのは、ロックバイソンの肩。  
そこには「牛の久保田」と書かれていた。

『ロックバイソンが止めたああ！ + 50 pt 獲得ううう！ もうと  
？しかし、犯罪者が逃げてしまうぞ？』

ほぼ垂直になった車から、犯罪者達が転げ落ちるよにして逃げ  
出した。

「お、おいー 待てー！」

しかし、ロックバイソンの鋭い角が仇になつたらしく、車に刺さ  
つた角が抜けずにおたおたとしているのが、お茶の間に流れる。

「よつしゃ、今だ！」

「逃がさないよー！」

勇ましい叫びと共に、どこからともなくしゃたつと華麗に参上し  
たのは、

『来たああ！ 「稻妻カンフーマスター」 ドラゴンキッドだあ  
ああああー！』

龍の刺繡のされ、改造されたカンフー風の服。

手にした長い真っ赤な棒が、ぶおんぶおんと、聞く者の身を竦ませ  
せる風切り音を立てながら回す、回す、回す。

そして、棒を腰の後ろに回して、びしりとポーズ。

びしりと決めたポーズは、頭に着けられた大きな丸い円形のパー  
ツに書かれたスponサーロゴの文字を、カメラへとはつきり映し出

していた。

彼らはNEXT能力を生かして戦うスーパーヒーローだ。それと同時に、会社に雇われ、スポンサーの広告を背負つて働くサラリーマンでもあるのだ。

ヒーロー達の活躍次第では、スポンサー企業の業績が鰐登り。しかし、HEROランキングと呼ばれるランキングが下位になってしまふと、広告の効果が無くなり、業績が右肩下がり。あまりにも活躍しないようであれば、HEROはリストラされる可能性すらある。

HEROとて世知辛い世の中だ。

しかし、そんな面仕えの悲哀など悪漢達には関係ない。

「撃て、撃て！ HEROだからって、銃で撃たれて無事なはずがあるもんか！」

兄貴分が叫ぶと、弾かれたように一人が動き出す。手に持つたマシンガンを、まだ幼さを残したドラゴンキッドに向けた。

「ちくしょう、こんな事になるなら最初からやつなきやよかつた！」

悲痛な叫びは彼の本心だろうが、同時に捕まりたくないといつのも本心だ。

拮抗する本心は、一瞬で天秤が傾き、彼に引き金を引かせる。数々の悪党どもを捕まえて来たHEROは、ここに鉛玉にやられてしまうのか！？

「ほあちやああああ！」

そんなはずはない。

右へ、左へと田にも止まらぬ速さで動くドリゴンキッドを、悪党の銃弾程度で捉えられるはずがないのだ！

稻妻カンフーマスターの名に相応しく、彼のNEXTは「雷を操る能力」だ。

テレビさえするよりこ、一瞬だけ「雷」の文字を電光で描くと、瘦身にその光を纏つ。

まさに電光石火といふ言葉が相応しい動きで、悪党の一人と距離を詰めると、

「ほわっ！」

地を這う虎が、空を舞う龍に飛びかかるが如き、天を突く蹴りが彼の腹に突き刺さる。

どすん、と腹の底に響く音。

そして、蹴りで宙に浮いた男より上へと、一瞬で跳躍。手にした棒はすでに振りかぶられている。

「あちよおおおー！」

天空を支配する龍が、小癪な虎を襲うが如き一撃が悪党に叩きつけられる。

その一撃は彼を地面でバウンドさせた。動かなくなつたのを確認した、ドリゴンキッドは棒を振り回し、再びびしりとポーズを決めた。

『ドリゴンキッド、華麗なカンフーで犯人を一人、逮捕おおおー！』

いつの間にか追い付いて来たHERO-TVの地上班の前で、スパンサーの口ゴが見えるように。

勿論、そんな事をしていれば、隙だらけになつてしまつ。

『おーっとー デリバリーの隙を突いて、残り一人が逃げ出したー!』

理性的に考えて、HEROに勝てるとは、短絡的な悪党でも考えていなかつた。

我欲の強い悪党達は、味方一人を囮にして、まんまと逃げ出したのだ。

『そして、ここで「見切れ職人」折紙サイクロンだ! 芸術的な見切れが、今日も美しい!』

スponサーのロゴが映し出されるよつ、カメラのフレームに半身のみ入るHERO。

その名は折紙サイクロン!

犯人逮捕より、見切れに命を賭ける姿はヒーローランキング下位でだらうと、妙な熱狂的ファンを与えている。

何せ折紙サイクロンを雇うベリペリデスファイナンス社の社長が、彼のファンになつてゐるくらいだ。

カメラが東洋のNINJAによく似たスーツを纏つた折紙サイクロンから外れると、格好いい(と自分で思つてゐる)NINJAっぽいポーズを解く。

「よつしゃー! 見切れたで! もるー!」

と、全身で嬉しさを表すよつに、叫んだ。

一応、説明すると彼のNEXTは「他人そつくりに擬態する能力」である。

普段、使う事はほとんどない上、見切れたとしてもポイントにはならないが。

必死に走る悪党達は、まんまと逃げ切つてしまつのか？まさかそんなはずはない。

ド派手に改造されたスポーツカーは、悪党達が乗つていたスポーツカーとは比べ物にならない。

走る彼らを後ろから、猛スピードでぶち抜くとフルブレーキング。アスファルトに火花を散らしながら、360。のフルスピンから、再び180。ターンをすると完全に停止し、犯人に向き合つ。

特殊なホイールを装備し、どんなスピンドルをしながらでも走れるイ力した車から、優雅に降り立つHERO。その名を、

『今日も魅せてくれるか、「ブルジョア直火焼き」！ 来たぞ、フアイヤーエンブレムだ！』

鍛え抜かれたそのボディラインを悪党に見せ付けるように、サイドチエスト。

見事な筋肉が薄い、赤を基調としたスーツに浮き上がる。覆面レスラーのようなマスクは、まるで昔ながらの正統派ヒーローだ。

しかし、地に降り立つたフアイヤーエンブレムは、力強いポジングを終えると、右手を腰に当て、見事なモンロー・ウオークで悪党に接近していく。

自慢のヒップが背中のマントの下から、ちらりちらりと見え隠れ。力強い男、セクシーな女を兼ね備えた彼／彼女。

「よりによつて、じいつかよー。」

「いやだ！ 捕まるなら違うHEROがいい。」

ファイヤーホンブレムは右手を悪党に向けると、空中に炎で「FIRE」の文字が描かれる。

「あらん、私の熱いベーゼは癖になるわよんっ！」

セクシーボイスと魅力的なウインク。

そして、彼らに送られるのは、熱い熱い炎。  
その炎を愛を籠めて、「ねる」「ねる」「ねる」  
一回転<sup>1</sup>とに巨大になつていぐ、彼の炎は悪党達の心胆を冷やした。

「炎を操る能力」のNEXTだ。

「うわああああああああーっ！」

「あらん？」

彼らがもし、その場に少しでも踏みとどまっていたのなら今頃、美味しそうなローストになつていただろう。

しかし、最初から逃げ出そうとしていた悪党達は、一瞬も留まる気はなく、真っ直ぐ背中を見せて逃亡していた。

「んーもつつー。」

彼らの背中、といつよつ尻を見ながら、ファイヤーホンブレムはしなを作った。

麗しいレディーを誘うような、魅力的な尻では無い。

その時点でファイヤーホンブレムは、追いかける気を失つた。

暗黙の了解で一度、獲物を逃したHEROは、次のHEROに出番を譲る事になつてゐる。

とは言え、やる気が無くなつたという理由で帰れるのも、彼自身ががヒーロー業務を委託されている七大企業『ヘリオスエナジー』の社長だからだ。

株主が少しくらい五月蠅いかもしないが、それくらい黙らせるだけの実績はある。

享楽を心から愛しているが、それに溺れないだけのクールなダンディ。同時に溢れるセクシー＆ナイスヒップ。

それがファイヤーホンブレムである。

『今、入った情報によりますと、強盗犯達はモノレールをハイジャックした模様です！ 何という事でしょうか…』

もしも、これが警察組織だつたら責任問題に発展しているだろ？。しかし、この場の責任者はTVのプロデューサーだ。

無責任、無遠慮、視聴率が取れれば何でもいいという、血も涙もない同業のプロデューサーにすら蛇蝎の如く恐れられる女傑アンヘルス・ジユベルールだ。

強盗犯がモノレールを乗つ取つた、という良心が欠片でもあれば、恐れおののくであろう事態に、彼女が発した第一声はこれだ。

「使えるわね」

部下であるケインは正直、本気で引いた。

見た目だけは美人キャリアウーマンなアニメスだが、きっとこのタイトスカートを脱がせば、小悪魔の尻尾などという可愛らしい物ではなく、サタンが尻から頭を出している事だらう。

事件が会議室で起きていようが、現場で起きていようが視聴率になればそれでいい。

移動式の中継車からアニメスは、ケインからインカムを受け取ると、通信を始めた。

「タイガー、聞こえる？ 今からCM入れるから、三十秒後に『ゴー』よ」

アニメスの声は蠱惑的な官能を含みながらも、言っている事は口クでもない。

一分一秒を争うような事態だといふのに、CMを入れて、スポンサー収益を上げろと言つてゐるのだ。

『はあ？ 何言つてんだ、CM？』

モノレールの上で、『王立ちをする男が、怪訝な顔をする。

『おおつと……』の大事な場面で「正義の壊し屋」ワイルドタイガーだ！ 大丈夫なのか、一体いいい！？』

青いスーツに身を包んだ彼こそ、株式会社「TopMang」のH EROワイルドタイガーだ！

しかし、その異名の通り、正義のためなら物を壊す事を躊躇しない。

かかつた賠償金は、十年以上にも渡るヒーロー生活でいくらにな

つているか想像もつかない。

それでも、まともな感性をしているタイガーは、アーニエスに比べれば余程、好感が持てると思った。

「そうよ。 その方が盛り上がるでしょ？」

『こんな時にCM待ちなんかしてられないよー』

「ちょっとー」

ワイルドタイガーハジに映るのは、悪党に銃を突きつけられ、脅える運転手の顔。

それは彼の燃える心が許してはおけない！

「ああ、もう！」

アーニエスの内心も、タイガーハジへの聞くに堪えない罵声で一杯だ！  
だが、そんなアーニエスの罵声を実際に聞いた所でタイガーハジは止まりはない。

ヒーロースーツが、はちきれんばかりに膨れ上がって行く。

これが彼のNEXT「ファイブミニッツハンドレッドパワー」だ。  
五分間のみ通常の百倍の身体能力を發揮するのだ。

「言ひ事、聞きなさい！」

『俺達、ヒーローは平和を守れりやそれでいいんだよー』

こういつ時は絵になる台詞を言ひのこ、とケインは思った。  
だが、何故かカメラが回っている所だと、口クな事を言わない。  
かなりのベテランのはずだが、世渡り下手だ。

しかも、

『ワイルドに吠えるぜー。』

モノレールのレールを掴むと、そのまま力任せに引きちぎると、  
飴細工でもしているかのように、レールを軽々と固結び。

もう、悪党も犯人も関係なく、涙目になりながら止まってくれと  
運転席では、モノレールのブレーキと神に祈っているだろう。

そのうち、タイガーが通算でいくら破壊したのかを検証する企画  
でも出そう、と思いながら、ケインは機材の操作の手を休めなかつ  
た。

「また……あいつ……！」

アニメスの憎々しげな言葉を部下として、礼儀正しく無視するく  
らいの世渡りはケインにはあった。

ついでにタイガーなら、こんな時に余計な事を言つんだらうな、  
という想像がはつきりと脳内に浮かんで来たが、僅かばかりの笑い  
と共に消し去つた。

## 一話『終わりも始めも良くはない』 後編

正義の壊し屋と呼ばれるワイルドタイガーだが、それが原因で他人を傷付けた事は殆どない。

人命救助にビルの外壁を破壊したとしても、破片の落下点に人がいないかどうかを、ハンドレッドパワーによつて強化された超聴覚により、確認しながらやつている。

荒々しいよう見えて、人命最優先の行いはまさにヒーローだ。今回もモノレールのレールを破壊したが、そのレールを曲げて車止めの役割をきちんとさせている。

しかし、

「やれやれ、まーたタイガーか。俺はこう見えても、タイガーに巻き込まれる事、四十五回のプロだからな。だから、ぶへら！？」

急ブレーキによる慣性を考えてあつたりはしない。

乗客達が慌てふためき、床に伏せる中、一人だけ座席で喋つていた男が急ブレーキで舌を噛んだ。

まあきちんと黙つて伏せていれば、このよつた事にはならなかつたが。

「こよつしゃあああああ！」

車内の様子など知る由もないワイルドタイガーは、モノレールがしっかりと止まつたのを確認すると、助走も無く飛び出した。

オリンピック選手でも、五メートルはあるであらう距離を助走無しでは難しいだろう。

しかし、ワイルドタイガーのハンドレッドパワーは、そんなちっぽけな距離を問題にせず、モノレールに飛び移る。

鉄拳一閃。

「ひいいいい！」

運転席のガラスを叩き割り、中に侵入。怯える運転手がうずくまり、頭を抱えているのを一瞬で確認。これなら銃撃戦になつても大丈夫、という所まで思考よりも早く判断。

そして、ここでタイガー決め台詞。

「悪党共、お繩につけ……つて、あれ？」

運転席には、怯えた運転手がいるだけで、悪党達の姿はどうにも見えない。

客車の方に逃げたか？ そうなつたら、厄介な事になるな…。

ワイルドタイガーは市民を見捨てない。

いや、HEROは市民を見捨てない。

つまり、ワイルドタイガー＝鎧木・T・虎徹は市民を見捨てない。正義の心が、虎徹の足を客車に向けさせ、

『馬鹿！ 下よ。』

「「うおつー？」

アニメスからの通信に少し驚きながら、見てみれば外に出る扉が破壊されていた。

運転中、万が一でも落下事故が起きないよう、自動的にロックされるが、悪党達が破壊したのだろう。そこから外を見てみれば、

「マジかよ。あいつら、ガツツあるなー」

感心半分、呆れ半分。

悪党達はシルバーステージの端から飛び降りると偶然、ブロンズステージの空を飛んでいた飛行船に取り付いていた。

一步間違えれば、下手な高層ビルより高い位置にあるシルバーステージから、ブロンズステージの地面へとダイブし、破裂したトマトになつていただろ「」。

『感心してないで追いかけなさいー!』

「お、おうー！」

一旦、運転席を出るとワイルドタイガーはレールの上に戻った。ハンドレッドパワーの力で、モノレールが落ちる事を恐れたのだ。だが、頑丈なレールの上なら問題はない。

足場がしつかりしているのを確認すると、ワイルドタイガーは恐れる様子も無く、ジャンプ！

百メートルは優にある空間を、

『あ、やっぱり行かなくていいわ』

「おやえよー?」

ぼふん、と音を立てて、飛行船の柔らかな船体に、ワイルドタイガーは飛び込んだ。

外側の壁の部分にしがみついているせいで、ちょっと情けない姿。どう見てもカメラ向きでなハだろア。

題にはならない。

何故なら、彼が来たのだから。

それは「ハーリング」はも  
れずとも理解出来た。

「私達は君を待つていたああああああああ！」

彼を専用に映すためだけに用意されていたDカメの左下から右下へと、白煙をたなびかせながら一瞬で通過する。

『君の登場を待つていたああああ！』

アナウンサーの絶叫が、シユテルンビルトに木霊する。

その絶叫は、ショーテルンビルトの全視聴者達の熱狂と一つだ。

由がメガ 背中に取り付けられており「マイスター」をアッ  
勿論、スポンサーのロゴを映す 画面を引く。

紫とシルバーを基調にしたロングコート型のスーツと、鉄兜のようなマスク。

『「キングオブヒーロー」スカイハイの登場だああああああああああああああ！』

ヒーローランキング連覇を達成し、名実共にキングオブヒーロー。空を縦横無尽に飛び回る「風を操るNEXT」を生かして戦う姿は、子供から大人までを虜にする。

カメラに向かつて、敬礼に似た決めポーズをすると更に加速し、フレームから飛び出す。

Aカメが加速するスカイハイの後ろ姿を捉えた。

同じように彼の所属企業アポロンライン社は、スカイハイの名に釣られるようにぐんぐんと業績を伸ばしている。

飛行船にしがみついているというのに、一台のカメラも来ないワイルドタイガーとは、商品価値が違う。

最初からランディングポイントを気にしない折紙サイクロンを除けば、今年のランディング最下位のワイルドタイガーとは違うのだ。

「負けてたまるかよ」

ランディングポイントが死ぬほど欲しい。

そうすれば、離れて行ったファンを取り戻せるはずだ。

そして、給料があがれば娘にもつといい生活をさせられる。

その想いを籠めて、虎徹は呟いた。

「負けてたまるかよ」

若きキングオブヒーローに。

その想いを籠めて、ワイルドタイガーは呟いた。

「負けてたまるかよ！」

そんな事を考え、ヒーローの本道を見失いそうになる自分に叫んだ。

萎えそうになる心に、炎を灯す。

崖つぶちのヒーローは、誰にも注目されない中で、一人足掻き続ける。

だが、だからどうした！

すでにスカイハイは、悪党達に占拠された飛行船の運転席に到着した。

一方、タイガーは必死の思いで外壁をよじ登った所。ここから全力疾走で向かつても、スカイハイが全てを終わらせた後だろう。

十中八九、間違いない。

そうでなければ、キングオブヒーローの名は、スカイハイの頭上には輝かなかつた。

だが、十の内、一か二は残つているのだ。

市民が、犯人が、そしてスカイハイが危険に晒された時、誰が助けられる？

それは、このワイルドタイガーダけだ！

「よつしやああ！　ワイルドに吠えるぜ！」

勇ましく、走り出すタイガー！

そして、即座に引き返すタイガー！

「うおい！？」

突如、飛来したRPG。つまり、「携帯式対戦車擲弾発射器」の弾頭が、ひゅるると音を立てながら、タイガーに正面から向かつて來ていた。

戦車の装甲を破壊するRPGが相手では、さすがのHEROと言えど、まともに当たればシャレにならない威力を持つ。

それに百倍の身体能力があろうと、狭い飛行船の上では走って逃げる訳にはいかない。

覚悟を決めるとワイルドタイガーは振り向き、逆にRPGの弾頭へとダッシュ。

蹴った瞬間、爆発しませんよ!!……！

と、祈りながら蹴り上げた。

何とか軌道を逸らし、空中で大爆発。

思ったより大きな爆発でワイルドタイガー 内心、ちょっとびっくり。

などと言っている暇もなく、至近距離で爆風に煽られた飛行船がビルに激突し、右舷のエンジンがぐしゃりと潰れる。

「やつべ！」

賠償、これからのは被害。誰の責任になるのか。

色々と不味い事はあるが、虎徹の頭からそれらが吹き飛ぶ。

ビルに激突した衝撃で、運転席から運転手二人が放り出されたのが、虎徹から見えた。

『さすがスカイハイ！ 犯人確保よりも、人命救助を最優先だ！』

最悪の結果はキングオブヒーローによつて防がれた。

風を操るNEXTにより落下速度を殺して、三人はふわふわと降下していく。

「あとは任せたよ、ワイルド君！」

「おう、任せとけ！」

スカイハイの檄に威勢よく応えると、ワイルドタイガーは走る。

「た、助けてくれえ！」

コントロールを失つた飛行船はビルにぶつかりながら、進路を変更。

シユテルンビルトを取り囲む大河に向かつてている。  
このままでは、どんな被害が出るかわかつたものではない。  
そして、悪党と言えど、HEROは命を見捨てない。  
あつという間に運転席に辿り着くと、

「ワイルドタイガーが助けに来たぜ！」

ワイルドタイガーの百の必殺技、サムズアップ＆ヒーロースマイルが炸裂！

「あ、いや、俺はスカイハイの方が」

「チョンジで」

「つるせえ！ 僕で十分なんだよ！」

正義の心を知らぬ悪党一人は、無駄に足搔ぐ。

「いやだあ！ あんただと口クでもない事に、巻き込まれそุดからいやだあ！」

「巻き込まれねえよ！？ …… たまにしか」

「助けて、スカイハイ！？」

「だああああ！ いいから大人しくしてみ！」

米俵でも担ぐように、暴れる一人を担ぐとワイルドタイガーは運転席から身を乗り出し、跳躍の態勢に、

「いつ！？」

目の前に客船があつた。

看板の上で脅える市民達の一人一人の顔が見える程の距離。  
右舷のエンジンが潰れ、進路を変えた飛行船は明らかに客船との直撃コースだ。

「やつぱり巻き込まれた！？」

「俺のせいじやねえだろうが！？」

「ぎゃああああ！」

「何やつてるのよ

その声は触れる者を皆、凍り付かせる絶対零度。

彼女の機嫌を損ねる事を、河の水すら恐れたのか、自らの身を押し上げ、飛行船に触れた。

キィイインと耳が痛くなるほどの静寂が、シユテルンビルトを包むと、一瞬にして飛行船と客船、辺りの水面ごとが凍り付く。

『皆様、お待たせしました』

これまで叫ぶように実況していたアナウンサーは、人が変わったように大人しい声を出した。

僅かに焦らすような溜めが入り、カツ！と音を立ててライトアップ。

凍り付いた水面の上に柱が屹立。その上で優雅に咲く花の名は、

『「ヒーロー界のスーパーアイドル」ブルーローズがああああああああああッ！』

「私の氷はちょっとヨーロード」

カメラが薔薇を模した扇情的なスースを下からのアングルで煽つて撮影していく。

露出の多い、その姿はキュートなお色気をお茶の間に届ける。

「あなたの悪事を完全ホールド！」

決め台詞とウインク。

同時に、七色の光が彼女の周りを乱舞する。

彼女の「氷を操るNEXT」に合わせて、プリズムの光を模しているのだ。

そして、ワイルドタイガーのサムズアップ＆ヒーロースマイルとは違い、お茶の間のお父さんの心をがっちりホールド！

ブルーローズへの歓声が、銃声に打ち消された。

「おいおい……」

ワイルドタイガーの胸に、銃弾が撃ち込まれていた。  
誰もが静まり返る中、ただ犯人の荒い吐息だけが聞こえる。

「お、俺は……」

若い悪党は初めて人を撃つた感触に、手にした拳銃を震わせながら、それでも言つた。

「どうせ捕まるなら、ブルーローズちゃんの方がいい！」

「あ、待て！ 俺もだ！」

「ふざけんな、お前、ひー。」

凍つた水面の上を滑るよつこじて、ブルーローズに向かつて走り出した。

そして、撃ち込まれた銃弾はスースで止められ、ワイルドタイガーはピンピンしている。

薄い全身タイツに似ているが、実は特殊合金で出来ていて拳銃程度なら完全にシャットアウトするのだ。  
しかも、伸縮性に優れ、下手な風船より膨らませる事も出来るスパークーな素材だ。

悪党達はワイルドタイガーなどに田もくれず、逮捕される前の最後の自由行使しようと走る…

「つねおおおおー。」

悪党達は逮捕してもらおうと、ブルーローズに銃を乱射。だが、ブルーローズとてHERO……そこは当たり前のよつこじだ。

「え、やだ。 なんでこつちに来るのー?」

『出たああああー！ キューティーエスケープ！ 今日もキュートだあああー！』

キューティーエスケープ。

その名の通り、可愛らしく逃げる技である。

立つていた氷柱から滑り台を滑るように、ブルーローズは逃げ出した。

「……何やつてんだ。 とつこー。」

『高ああああああい！ ワイルドタイガー大ジャンプ！』

このままではラチがあかない。

六人のHEROから逃げられる悪党は無し。

それを証明するのは、この男ワイルドタイガーしかいない！

ハンドレッドパワーを生かした大ジャンプは、十メートルを超える。

そして、ワイルドタイガー百の必殺技の一つ「ワイルドキック」を悪党達にお見舞いしてやるんだ！

頑張れ、タイガー！ 負けるな、タイガー！

5

4

3

2

1

「あつ」

『ワイルドタイガー、ここで時間切れえええ！ ハンドレッドパワーは、五分しか持たなあああああい！』

はちきれんばかりに、スーツを盛り上げていた筋肉が常人並みに戻る。

跳躍の勢いが、重力と釣り合つて一瞬の無重力状態を生み出す。

そして、そのまま空中遊泳。

このままでは、重力の鎖に引かれたワイルドタイガーは、凍り付いた水面を赤く染め上げる染みになってしまつだらう。

ロックバイソンはやつと車を下ろせた所だ。

ファイヤーエンブレムと、ドラゴンキッドは、ロックバイソンに付き添つてゐる。

折紙サイクロンは観光客の記念撮影に見切れている。

スカイハイは運転手達にサインをせがまれて動けない。

ブルーローズは、まだキューティーースケープをしている。

今、ワイルドタイガーを助けてくれるHEROはないのだ。

「つおおおおおおーー?」

迫り来る水面にタイガーが田をつぶつた、その時!

黒いボディに、赤い光のラインが走る。

腕、肩、頭の横、背中、身体各所に取り付けられたクリアパーツに赤いラインが触れると、充填されるようにクリアパーツを赤く輝かせる。

一陣の旋風が通り過ぎると、ワイルドタイガーを追つていたCカーメのフレームから消え去つた。

『なんともおおおおーー?』

あらかじめ計算していたのか、赤い旋風が着地すると、田の前には氷で転んでいた悪党。

再び赤い旋風は飛ぶ。

それも、ゆつくりと、だ。

『絶体絶命と思われていたワイルドタイガー！　何とお姫様抱っこで救出されたあああああああ！』

ゆづくじとしたジャンプは悠々とカメラを追随させる。スタイルッシュな跳躍、両腕にはワイルドタイガーを抱え、指先で引っかけるようにして悪党を抱える姿は、アニエスが思わずガツツポーズするほど絵になっていた。

「しっかりしてくださいよ」

ワイルドタイガーが、そのクールでセクシーなボイスに目を開けると同時に、

「ぐえつ」

客船の看板に投げ落とされた。

”偶然”そこを撮影していたヘリのカメラが、謎のヒーローの姿をアップ。

『これはああああああ！』

サーチライトが彼を照らす。

一旦、横を向くとマスクの面を上に上げる。  
零れ落ちる蜜のように美しい金髪が光輝く。

『これはあああああ！　ハンサムだあああああ！』

甘いハンサムフェイスはカメラ目線。

上空のカメラに向けて計算し尽くされたハンサムスマイル。

スタイルッシュなポージングとハンサムスマイルは、お茶の間の

奥様と娘達の心をがっちりホールド！

『何というハンサムウウウウー！ソラニグーハEROが誕生だ  
あああああああ！』  
『…

バーナビー・ブルックス Jr. 慧星の如くHERO TV初  
参戦。

「ちくしょー……」

一方、ワイルドタイガーは置いてあつた樽にハマっていた。  
スポットライトに照らされたステージを、暗い舞台袖から眺めて  
いるようで、ひどく心が疼いた。

一方、ブルーローズは、

「犯人逮捕したのに、カメラ来ないじゃない！」

「ローズちゃん、うへへ……」

犯人の頭を踏みつけながら、キレていた。

幕間『酒は人類の友だが、酒の側がどう思つてゐるかはわからない』（前書き）

……ラノベっぽい書き方つてどうやるんだろ？

展開から、どうしようもねえ。

幕間『酒は人類の友だが、酒の側がどう思つてこむかはわからぬ』

「なあ、ベンさん。 今日、ちょっと一杯行かない?」

鎌木・T・虎徹が、ベン・ジャクソンに声をかけたのは、バーナビーの鮮烈なデビューの次の日。

田を逸らし、いつも被つている帽子を指で回しながら、落ち着きの無い様子に、ベンは時が来た事を悟つた。

これまでずっと慣れ親しんで来たTopMa社のHERO事業部で、彼がこんな態度をするのは決まって言いにくく事がある時だつた。

「ああ、俺も昨日の事でたつぱり言いたい事があるからな

「たはー、お説教は勘弁してくれよな」

わざとさしきれおどける虎徹の田尻に皺を見つけ、ベンは彼と組んでやつて来た年月が、驚くほど早く過ぎ去つていた事に気付いた。

「馬鹿者。 お前にほんたつぶつ言わなきゃいけない事があるんだ

ナ

ベンは虎徹の胸に拳を当てると言つた。

「なあ、虎徹」

「なんすか、ベンさん」

シルバーステージにある居酒屋。

ちょっととした仕切りがあり、畳の上で胡座をかきながら、誰にも邪魔せずに飲める。

あまり日本式には馴染みの無いシュー テルン ビルトだが落ち着いた雰囲気と並い肴は、それなりにこの店を繁盛させていた。

「お待たせしました。肉じゃがと、イカの一夜干しがございます」

料理を運んで来たウェイトレスに、話を中断される。

が、ホクホクと湯気を立たせる肉じゃがは、たまらない物がある。魅惑的な香りを漂わせる肉じゃがに、ベンは生睡を飲み込んだ。あまり食にはこだわらない虎徹と違い、ベンは食道楽だ。

三食チャーハンしか食べない男と、三食を楽しんで味わう男。どちらの方が仕事が出来るかななど考えるまでもない。

箸をじゅがいもに伸ばす。

ぐちやりと漬れる事もなく、しっかりと掴めた。

それでいて、口の中に入れば程よい食感を残してくれる。味がよく染み込んでいた。

欲求のままに辛口の日本酒を一口呑む。

「なあ、虎徹」

「ベンさんは本当にうますぎに飯食いますよね」

「何言ってやがんだ。皿に飯を食つてこそ、いい仕事が出来るんだよ。それだっていうのに、お前はいつもチャーハンでだな」

「はいはい、それは耳にタコが出来るくらい聞きましたよ」

肩を竦める虎徹に、ベンは少しうつとした。

「いいや、お前は何もわかつてない。昨日だつてモノレールのレール曲げやがつて」

「い、いや、あれは」

「レール、曲げる必要あつたか？ 窓ガラスだつて、割らずに済んだだろ？」

都合が悪くなると、すぐに目を逸らす。

額縁を生やす前からの虎徹の癖だ。

「こつは何も変わっちゃいねえ。

それが嬉しいと思い、それがどうにも危なつかしくて仕方がない。

「そんな事、言つたら平和なんて守れないですよ……」

先生に怒られている生徒。

今の虎徹は、そうとしか見えない。

小学生の子供もいるのに、全く大人に成り切れていない。

「あれ、いくらかかるか知つてゐるのか？」

迅速に乗客達を救出する必要があつたため、という理由で司法局に掛け合つた自分を褒めてやりたい。

客観的に見て、あそこまでやる必要はなかつた。

もし万が一、乗客の一人でも撃たれていたらワイルドタイガーの責任問題になつていたかもしれないのだ。

この男は、いくつになつても手がかかる。

ベンは酒を口に含んだ。

「……すんませんでした」

「今度、司法局のコーリさんに頭下げてこい。 あの人があの人が口添えしてくれなきや、問題になつてたぞ」

「うへえ……あの人、苦手なんすよね」

「馬鹿野郎、態度には出さないけど、あの人はお前のファンだぞ。 ファンを大事にしないHEROが、どこにいやがる」

「マジで! ? あの蛇みたいな人が、俺のファン……?」

「ああ、マジだ」

コーリ・ペトロフ。

HERO業務に関わる企業の会議にも司法局から参加し、HEROが破壊した物品の賠償などは彼が決める。

若くして、重要なポストを与えられるだけあって、公平な判決と柔らかな物腰は、ベンに好感を与えた。

腐った役人の中でも、一際輝く誠実な仕事ぶりはなかなかのものだ。しかし、そんな彼がワイルドタイガーに関係すると、僅かにほんの少しだけ羨戻をする。

気付いている者は殆どいないだろう羨戻が、ワイルドタイガーを一番、近くで見ているベンにはよくわかつた。  
一回りは違う年の彼に、ベンは勝手に同士にも似た気持ちを抱いていた。

「……サインとかした方がいいですかね？」

「……似合わねえなあ」

ワイルドタイガーのサインを貰つて喜ぶコーリを想像しようとしたが、全く想像が出来なかつた。

「まあ今度、ちゃんと挨拶してきますよ……ベンさん」

「なあ、虎徹。お前がHEROのやつてられるのは、誰のおかげだ？」

「それは……」

ファンのおかげだ。

そんな内心の言葉が、ベンにも伝わつてくる。  
しかし、

「スポンサー様のおかげです……」

それを飲み込めるくらいには大人になつていた。

「せうだら。だから、お前がしつかりしなべりやせうだら。

俺がお前を守れないんだよ。

いつもなら、そう言っていた。

TopMa 社 HERO事業部のベン・ジャクソンとして言つて  
いた。

「お前がしつかりしなくちゃ黙だなんだと

「ベン・

もつ一度と、その言葉は言えなかつた。

「……本当なんすか？ TopMa が HERO事業から撤退する  
つて」

「誰から聞いた？」

答えば聞かずともわかつていた。

「昨日、俺を助けてくれたあいつです……。中継が終わった後、  
少し HEROの心得を説教してやるやつとしたら……」

『はまつ、じつひつてなかつたか？』『古いんですよ、そんな考え

』

「なまつ、似てるー……あいつと知り合いなんですか？」

『

「知り合い……まあ知り合いだな。お前と同じくりこには長い付き合いだ」

子供だったバーナビーが、虎徹と同じヒーローになるとこう事が、ベンには馴染まない。

馴染まないが、それと同じくらいに納得もしていた。  
あの切ない目をしていた少年が、切ない目をしたまま青年になってしまったのだ。

「そ、うなんすか……。あいつに言われたんですよ。あなたがしつかりしてれば、TopMa<sup>g</sup>が潰れる事もなかつたって」

「あいつの言ひそうな事だなあ」

クールなふりをしながら、実は一本気なバーナビーを思つと、彼がどんな表情で言ったかも想像が出来た。  
それが少しおかしくて、ベンは笑つた。

「笑い事じやないですよ！ なんで教えてくれなかつたんですか！？ 僕がもつとしつかりしてれば！」

傷付いた表情を浮かべる虎徹に、それが答へなかつたんですね！  
語りかけた。

少しでも綺麗なまま、虎徹を送り出してやりたかった。

「ふざけんなよ、虎徹

だが、それを言つつもりはない。

「え」

「俺がしっかりしてればだと？　お前はどれだけ偉いんだ？」

「ベンさん……」

「お前だけが働いてるつもりなのか？　違うだろ」

田を逸らそうとした虎徹が、必死に向き直りうつしている。

「俺も頑張った。　経理の吉野ちゃんが、本当に頑張ってくれた。　皆、頑張ってくれた」

他の巨大企業に比べて、TopMa<sup>gol</sup>は小さい。  
そのくせ利益の大きいHERO事業に食い込んでいたTopMa<sup>gol</sup>は、他の大企業に弾き出されたのだ。  
落ち田だったワイルドタイガーより、買取を持ちかけて来た企業から提示された利益にTopMa<sup>gol</sup>飛びついた。  
ベンは、虎徹を守れなかつた。

「お前だつて頑張つてただろ？」

「…………」

「明日の閉会式が終わつたら、ここに行け」

ベンは一枚の名刺を取り出し、虎徹に渡した。

「……なんすか、これ」

「新しいお前の上司だ。　しっかり挨拶して來い」

名刺には「アポロ・メテイア アレキサンダー・ロイズ」と書かれている。

ワイルドタイガーを、TopMagは売った。  
これから色々な事が虎徹の前に待ち受けている。  
HEROを辞めたくなる事もあるかもしれない。

「ベンさんはずいぶんだよ！ ベンさんを置いて行けねえよ！」

だが、それでも、

「なあ、虎徹。俺はお前がHEROやつてるのが好きなんだよ」

結局、ここまでやつてこれたのは、それだけが動機だったのだろう。

それを思えば、ここで背中を押してやるくらい何ともない。

「俺の事なら大丈夫だ。なに、失業保険でのんびりしながら、次の仕事でも探すさ」

これから的生活の苦しさも、手塩にかけたワイルドタイガーを奪われる苦さも酒で飲み下して、ベン・ジャクソンは笑った。

幕間『酒は人類の友だが、酒の側がどう思つてゐるかはわからない』（後書き）

折紙先輩の出番は「れでいい」と思つ。

## 一話『人の印象の八割は初対面で決まる』

前編（前書き）

前話でベンさんの台詞を修正しました。

名刺を渡して、

「明日、ここに行け」

「明日の閉会式が終わったら、ここに行け」

となっています。

## 一話『人の印象の八割は初対面で決まる』 前編

アレキサンダー・ロイズは鏑木・T・虎徹と初めて出会ったのは、一年も終わりに差し掛かり、HERO-TV年間ランキング発表式の打ち上げのパーティー会場だった。

それなりに格式高く、豪華ではあるが無個性なパーティー会場にはシュテルンビルト中から、全世界から名士達が集まり、笑顔と言葉を武器に鎧よのきを削つっている。

人が集まれば金と情報が動く。

まだまだそこに参加出来てはいるとは言い難いが、それでも大きな物の近くにいるという事はロイズの自尊心を満足させてくれた。これをきっかけとして、自分がもっと上のステージを目指せるのだという実感もある。

ロイズは自分の顔と名前を売り込むチャンスを逃すまいと、必死だった。

しかし、その必死さを出してはいけない。

必死さとは余裕の無さ。余裕の無さとは金の無さ。

金の臭いのしない男は仕事が出来ない。

五十に差し掛かり、仕事人として円熟を迎えたロイズは焦りを面に出すような無様は晒さず、接する者に好感と強い印象を与えて行く。

VIPに話しかけながら、ロイズは観察していた。

この場の主役であるHERO達を。

アポロンメディア社HERO事業部アレキサンダー・ロイズの飯の種を。

ひたすら料理を食べるドラゴンキッド。

まだ十代の半ばであり、色気よりも食い気を地で行つている。

下手にスポンサーに売り込ませるより、老人が多いお偉い方には

「この方が正解だろ？」

若さはそれだけで可愛がられ、武器になる。

しかし、少年として売り出されているが、実は少女である彼女自身は何か思う事は……満面の笑みで貪る彼女を見ているとありそうもない。

これから力をぐんぐんと伸ばす彼女の商品価値は計り知れない。しかし、近くにいるマネージャーと思われる若い女の目には、隠しきれない甘さが見える。

商品を商品と見れない以上、自分の敵ではないとロイズは思った。

もう一人の女性であるブルーローズはと言えば、

「あの決め台詞、何とかならないんですか？ 正直、かなり恥ずかしいんですけど」

自社の社長に食つてかかっている。  
確かにあの決め台詞はいただけない。  
もし、自分に任せてくれば、もつといい決め台詞を用意するもの、とロイズは思った。

会場で一際、大きな人集りを集めているスカイハイはどうか。

「ありがとう。そして、ありがとうー！」

ランキング連覇のキングオブヒーローは乗りに乗つていて。  
そこに生まれ持つているキュートな輝きを乗せれば、商品価値は最上級だ。

ただ、グッズ関係が弱かつた。  
フィギュアなど今までのHERO達と変わらない路線以外にも道はあるはずだ。

自分に任せてくれば、グッズの売り上げを三倍にしてやるもの  
を、とロイズは悔しさを抱いた。

スカイハイの体操教室を出せば、バカ売れ間違いなしだろ。ひ  
それにしても男性陣は、入社したてのサラリーマンのように着慣  
れていないピカピカのスーツと、ヒーローマスクを被つていて正直、  
不気味だ。

折紙サイクロンは……そもそもどうしようもない。

見切れ職人などという二ツチなキャラが付いた彼は、その広がり  
ようのない路線で行くしかないだろう。

ロイズとしては全く興味が沸かない。

十代の頃、コレクションしている切手を八時間自慢したら、逃げ  
て行つた彼女も同じ気持ちだったのだろうか、としばしノスタルジ  
ーに浸つた。

不器用に自分を売り込むロックバイソンに、ロイズは一切の魅力  
を感じなかつた。

しかし、そこにファイヤーエンブレムが加わればどうか。

ロックバイソンをからかうふりをしながら、スポンサーに売り込  
んで行くファイヤーエンブレム　　ヘリオスエナジー社、社長ネ  
イサン・シーモア　　の手腕は恐ろしい物がある。

最終的に敵となるとすればネイサン以外にはいないと、ロイズは  
確信した。

そんな中、ワイルドタイガーは鏑木・T・虎徹は、

「よつ、何かうまいもんあつたか?」

「んー、このハギスは美味しかつたよ

「ハギスつてお前、こんなもん……うまいな、これ」

「でしょー？」

ドリゴンキッドと暢気に飯を食い、

「最近、ブログが炎上したでござる……」

「俺なんて三日で更新するの忘れたぜ」

折紙サイクロンの相談に乗つたりしていた。

ワイルドタイガーは崖っぷちだ。

実質、ランкиング最下位の彼は必死になつて頭を下げ、スponサーを探さなければならぬのはずの立場だ。

間違つても、のんびり飯を食べながら、他人の相談を受けている暇はないはず。

しかも、何故か一人だけ私服だ。

小物にもイヤヤミにならない程度に金をかけ、なかなかのセンスを感じられるが、だからと言つてパーティーに出る服装では無い。

そのくせ、彼の周りには人が集まつて来る。

彼の服装を咎める者もおらず、明らかにお偉いさんと見える相手とも、平然と話すワイルドタイガーは、この場の主役の一人だった。相手から人が集まる立場ではないはずのワイルドタイガーは、立場以外の何かで人を集めていた。

それはロイズに絶対的に無い物だ。

HEROだけではなく、大企業の社長達までがワイルドタイガーケを詣でて行く。

スponサーになつてくれ、と頭を下げる訳でもなく、ただ話してそれで終わり。

あれだけのチャンスをふいにしていくワイルドタイガーに、ロイ

ズは苛立つた。

ちよろちよろしていたワイルドタイガーが、ファイヤーホンブレムの元に行つた時、チャンスだと気付いた。

ロイズからワイルドタイガーに挨拶をするのは、鼎の軽重が問われる。

「あらん？ アレクちゃんじやないの」

「おお、ファイヤーホンブルーさん。いらしてたのですか」

ファイヤーホンブルーは、ロイズの思惑を読み取ってくれた。  
こうやって自然に挨拶をする分には問題あるまい。

お互に気付いていなかつたふりをするくらいは、当たり前の話。  
白々しいと思つていては、仕事にならない。

このままスムーズにワイルドタイガーを紹介してもらえば、

「ん、誰この人？」

しかし、マナーも駆け引きもワイルドタイガーは完全にぶち壊す。

「こちらアボロンメディアのアレキサンダー・ロイズですよ。来期からHERO事業を統括なさるの」

「どうも」

内心の苛立ちを完璧に隠して、ロイズは挨拶をした。

TopMaからロイズの名は伝わっているはずであり、これまで頭の一つも下げなかつたワイルドタイガーもこれで、

「あ、どうも」

普通に挨拶を返された。

「…………」

「…………」

社内秘にはなっているが、ヘリオスエナジー社長のネイサンには、来期からワイルドタイガーハーがアポロンメディアに移籍する予定は伝わっているだろう。

しかし、本人だけがよくわかっていない。

思わず、ネイサンと無言で見つめ合ってしまったのは、仕方のない事だろう。

ネイサンの黒い肌に汗が流れ落ちた。

「……ちょっといらっしゃなさい」

「どうしたんだ？」

「いいから早く来いって言つてんだらうが！……ちょっと待つて頂けますかしら？」

女性のような口調と、荒々しい男性の口調と、気分次第で切り替わるファイヤーホンブレムに面食らう相手は多い。

「は、はい」

びくりとしてしまったロイズが特別、臆病という事はないはずだ、多分。

ワイルドタイガーの首根っこを掴むと、ファイヤーエンブレムは、

「……の人が……の新……上司……！」

「え、あのおっさんか！？」

おっさんにおっさんと言われる筋合いはない。  
ロイズは心の底から思つた。

「あー……どうも。これからお世話になります……です」

ファイヤーホンブルムから解放されたワイルドタイガーだが、頭をかきながら挨拶をしてきた。

「資料は拝見してますよ。 とらてつだからタイガーね」

「あ、いや、じてつです。 鎧木虎徹……です」

もし、この場にネイサンがいなければ、もつといやミつたらしく  
言つてやつただろうが、この程度が限界だつ。  
名前も読み方くらいは、さすがに覚えている。

「アレクちゃんは」う見えて、とっても偉いんだからねえ。 失礼  
しちゃ駄目よ？」

「わかつてゐて！ ガキじゃないんだから」

「はつはつは……なかなか個性的だね、とらてつくんは」

「じてつです」

ですを付けければ敬語だと思つてゐる男が、ガキでないなら何なの  
だろうか。

「そつといえは君の今後の予定は聞いてるかな?」

「あ、いえ何も……です」

「明日から来てもらつても構わないかな?」

「明日にファイヤーホンブレムがいなければ、こんな丁寧には言わ  
ない。」

明日は覚えている、という思いを縛り付けながら、ロイズは言つ  
た。

「あ、明日は娘のフィギュアスケートの発表会があつて……です」

「嫌なら辞めてもらつてもいいんだよ?」

あ、と思つた瞬間には全て口から零れ落ちていた。

明日、一日くらいなら本来は問題ない。

それにまだ一枚の書類も交わしていない以上、法的にはアポロン  
メディアは、ワイルドタイガーを拘束出来る道理はない。

しかも、この場にはネイサンまでいる。

こんな下らない事で、ワイルドタイガーを気に入つてゐるネイサ  
ンの機嫌を損ねて、アポロンメディア対ヘリオスエナジーの引き金  
を引いた男にはなりたくない。

「……わかりました……です」

しかし、ワイルドタイガーは、虎徹は応えた。

「あ、ああ。よ、ようしく頼むよ」

何かをぐつと抑え付けた目をした虎徹に一瞬、ロイズは言い淀んだ。

暗い目だった。だが、そこには確かに力があった。

それはロイズは知らない目だった。

何かを言わなければならない。

そう考へても言葉にならない。

お偉方におべつかを使うのには、よく回る舌は今、何の役にも立たない。

「おお、ロイズ君、ここにいたのかね」

「し、社長……！ 紹介いたします。彼が来期から我が社の「ユーロHERO」のワイルドタイガー君です」

会話に割り込んで来た社長の姿に一瞬、安堵してしまった自分を、ロイズは許せそうに無かつた。

『一話『人の印象の八割は初対面で決まる』 前編（後書き）

これから先、タイバーの一次が増えたとしても、ロイズさんにここまでスポットを当てる話は他に出てくるだらうか。

## 一話『人の印象の八割は初対面で決まる』 後編1

ロックバイソン」と、アントニオ・ロペスを一言で評するなら『善人』だ。

今も必死にスポンサー探しをしなければならないのに、親友の虎徹が心配でならない。

少し離れた所でそわそわしている自分が馬鹿馬鹿しいと思いつながら、離れる事が出来ない。

「君がワイルドタイガー君かね。いやあ、いい面構えじゃないか」

「はあ……どもです」

「どもです、じゃねえだろ。

アントニオはツッコミたくなる自分自身を抑えた。

何せ相手はメディア王にして、HERO-TVを放送しているアーロンメディアの社長アルバート・マーベリックだ。

来期からアーロンメディア所属になる虎徹の上司になる相手に、その態度は何なのだと正座させて説教してやりたい。

もしさうでも機嫌を損ねた田には、クビは間違いない。

もしも、マーベリックが本気を出せば虎徹を犯罪者として、報道する事も出来るだろう。

「……少しは落ち着きなさいよ」

「お、俺は冷静だ！」

ネイサンの言葉に落ち着いて返事を出来る程度にアントニオは冷静だ。

何故か吐かれた溜め息を不思議に思いながら、虎徹とマーべリックの会話に耳をしました。

「はつはつは、やはり君のよくなべテランHEROは頼りになるね。君を選んだ私の目に狂いは無かつたよ」

「不肖、この鎧木・T・虎徹に万事、お任せください!」

ほんの少しの間に何があったのか、一人はやたら打ち解けていた。  
「いや、待て。ひょっとしたら、まだ逆転ホームランがあるかも  
しない」

なにせ虎徹だ。

たまに鋭い所を見せたと思えば、じつしてそこまで?と無骨者の  
アントニオですら思つほど鈍い時がある。

「ほんと、気は小さいわよね……。娘が出来たら、箱入りにして  
鎖で縛つて飾つておくタイプでしょ」

自分の娘とこうフレーズに、アントニオは思いを寄せるHERO  
TVのプロデューサーのアニメスの顔を脳裏に浮かべた。

アニメスさんとの娘……。

一目見た時からアントニオはアニメスに恋をした。  
可憐で清楚なアニメスの立ち姿。

座れば大輪の薔薇のようであり、彼女の唇から零れ落ちる言葉は  
百合のように甘やかだ。

彼女が望むなら、アントニオは身体を張るだらつ。

戦えと言つなら、マーベリックとでも、

「僕はこんな人とは組めません！」

「バーナビー、いきなりどうしたんだね？」

「俺だつて、お前なんかと組めねえよー！」

妄想に浸っていたアントニオを現実に引き戻された。いつの間にかマーベリックの横に男が立っていた。名前を確か、

「バーナビー・ブルックス」「。ハンサムよね、彼

「おお、そうだつた」

シーズンの最後に颯爽と登場し、シユテルンビルトの話題を独占した伊達男。

すらりとした長身にチャラついたホストのような真っ赤なスーツ纏っている。

恐らくあのベビーフェイスで、女を食い物にして来たのだろう。そのハンサムフェイスに似合わぬ目つきの悪さが動かぬ証拠だ。

何としても俺がアーニエスさんを守らなければ。

アントニオは固く心に誓つた。

その誓いはきっと、アントニオのNEXTよりも堅い。

「その頑固さが可愛い所なんだけれどねえ……」

「ん？ バーナビーは頑固なのか？」

ネイサンの人を見る目は確かだ。

アントニオのよう信じすぎる事もなく、的確に人を見抜く。  
何度もアントニオの窮地を救つてくれたこの得難い友人は、ただ  
アニエスの魅力のみ理解出来ない。

恐らくアニエスの美しさに嫉妬して、目が曇つているのだろう。  
牛角がそんな事を考えていると、

『ボンジュール、ヒーロー』

アントニオの天使から通信が入つた。

シュテルンビルトには沢山の人々がいる。  
その中で彼らを一種類に分けるとして、最もわかりやすい言葉は  
何か？  
『成功者』と『失敗者』だ。

今、二人の男達がその分水嶺に立つていた。

「我々はシュテルンビルト防衛軍である！ この腐り切つたブル  
ジヨア達から富を分配し、我々は労働者の正当な権利を勝ち取るの

だ！」

三方を河川に囲まれたシユテルンビルトの冬は寒い。

それは夜になると、どれだけの厚着をしていても変わらない。

「なあ、佐藤……そろそろ帰ろうぜ」

「馬鹿！ 同志と呼べと言つただうつ、田中！」

二十代の始め頃だろうか。

街頭に立つ一人は、とにかくありつたけの防寒具を着込んで来ましたという有り様。

よほど寒いのか、顔を隠すような厚手のマスクをして、なお震えている。

「お前も田中つて言つてんじゃねえか……つーか、もう帰ろうぜ」

「何を言つて、同志田中よー。我々、労働者は団結せねばならんのだ！」

「いや、団結どじいか……歩いて行く人、ガンスルーじゃん」

「む、むう……」

拡声器も持たず、たつた一人だけの街頭演説などまともに聞く者など、よほどの暇人でもなければお断りだらう。

「だ、だが、貴様にも革命闘士としてのプライドが！」

「ねえよ。つか、女の子にモテるって、お前に誘われて着いて来

た俺が馬鹿だつた！

「何を言つてゐるー！」

佐藤は憤りを露わにマスクを外しながら言つた。

「我輩がモテるのは事実だ！ これはつまり革命闘士がモテるということ。 同志田中よ、貴様も革命に青春を燃やせ！ さすれば貴様もモッテモテのウツハウハ間違いなしであるー！」

マスクの下から現れたのは、整つた顔立ち。  
ぱっちりとした一重瞼が、彼に何とも言えない色氣を『え』ている。  
若獅子のように豊かで豪奢な金髪。

怒りに赤く染まつた白い肌は、暇と金を持て余したマダムを相手にすれば、車の十台くらいは簡単に『えてくれるだろ』う細やかさ。  
つまり、

「ちげーし。 てめえがイケメンなだけだろー。 革命関係ねーしー！」

「いいや、革命だね！ 我輩革命だねー！」

「意味わかんねえー？！」

ぱち、ぱち、ぱち。

言い争ひの一人の間に手を打つ音が割り込んだ。

「さすがは革命の闘士様ですわね。 先ほどどの演説はお見事でしたわ

奇妙な女であつた。

「つむ。ほれ見ろ、田中。わかる者はほ、我輩の革命精神がわかるのだ！」

厚着をしていても田中が寒さに震えているほどの中、その女は大胆にカットされた白のノースリーブと所々、肌が露出したパンツのみ。

まばたきするたびに瞼に見える、スペードのマークを描いた奇妙な化粧。

奇妙な女であった。

そして、

「美人だ……」

「あら、じゅうらの方も頼りになりそりですわね。実は……革命闘士様達にお願いがありますの」

聞いて下さいますか？と小首を傾げる彼女に、

「つむ、か弱き婦女子を守るのも革命闘士の「」の田中一郎に万事、お任せください！」…………お前

「さすが革命闘士様ですね！　実は……えっと、こんな場所では、ゆっくりとお話出来ませんわ。　わたくしに着いて来て頂けませんでしょうか？」

「はつはつは、革命闘士である僕が、あなたのような麗しき女性の頼みを断るはずがないではありませんか！」

「まあ！　やすがですわね！」

「ところでお嬢さん、お前を伺つてもよろしいでしょうか？」

女はチャーミングな（佐藤には胡散臭く見える）笑顔を浮かべる  
と、

「クリームをお呼びください」

クリームと名乗る女に一発で骨抜きにされた田中の背を見ながら、

「やれやれ、きな臭い事になりそうだ」

革命闘士は肩を竦めた。

しかし、その口元は、闘争の臭いを嗅ぎ付け、本人も気付かぬうちに歪んでいるのだった。

一話『人の印象の八割は初対面で決まる』 後編1（後書き）

「ううう訳わからんキャラ出すのは大好きです。

一話『人の印象の八割は初対面で決まる』 後編2（前書き）

自分の字数計算の出来なさに、背中がマッハでヤバい。  
あいたたた……。

一話『人の印象の八割は初対面で決まる』 後編2

「あれ、俺やつちやつた?」

「完全にやらかしたな」

田中と佐藤はシユテルンビルト銀行シルバーコースト支店の中にいた。

時間は夜の九時。

まだまだ歩いている人は多いはずだが、シャッターが下ろされ、外の様子は伺えない。

「二の銀行は俺達が占拠した!」

「ヒヤツハー!」

他にも五人の覆面を被った男達が、天井に向かつて銃を乱射している。

その暴虐に、まだ残業をしていた数名の職員と警備員が怯えたよう身を竦めた。

クリームと名乗る女の色気にふらふらと着いていく田中と、止める気がなかつた佐藤はあれよあれよという間に車に乗せられて辿り着いた結果がこれだつた。

全員に自動小銃一丁が渡され、隊長格の男一人がRPG一本ずつ背負つている。

何が楽しいのか、まだ壁や天井に銃弾を撃ち込む男達を見て、佐藤は少し離れた所で吐き捨てた。

「何をやつてゐるんだ、あいつらは。まだ金が手に入った訳ではないといふのに」

「つていうか銀行強盗じゃん！」

「全くプロではないな…」

「じゃあ、お前はプロなのかよ！…？」

「いや、まだやつた事はないぞ」

「まだ！…？」

「それより、壁際に寄れ」

「何でだ？」

「ああ、そこにいると突入に巻き込まれる」

佐藤は腕に巻いていた通信機を、TVモードに切り替えた。  
チャンネルを合わせると、流れて來るのは田中にも馴染みの深い  
曲。

「おい、これって……」

「ああ、あれだ」

シユテルンビルトに住む全ての人気が知つてゐる。  
悪党は恐れおののき、全力な市民には安堵を齎す。

『さあ、今宵も始まりました。エンターテイメントレスキュー番組HERO-TV！今日の犯人達は』

「田中、お前は逮捕歴あるか？」

「ねえよ。つて」

数人の犯人達の名前と覆面を被つた顔写真が公開され、最後に覆面姿の田中と佐藤が映し出される。

田中一郎と佐藤奏といふ名前まで全国放送に乗った。

「俺も出てんじゃん！？」

「どういう事だ……？ 革命闘士たる我輩ならともかく、前科の無いただの大学生の田中まで名前が出るとば」

「知らねえよ！？ そ、それよつすぐに逃げよつぜー……クリームさんもいないし」

こんな時まで女を優先する友人に内心、戦慄しながらも佐藤は落ち着いた声で言った。

「まあ待て。今、逃げたらあいつら田中から撃たれる。こには我輩に任せろ」

「あ、おお……」

見た事がないほどに生き生きとした友人の姿に、佐藤は一縷の望みを託した。

「あのスーツは俺の魂です。あれ以外、着るつもりはありません」

「嫌なら辞めてもうつてもいいんだよ?」

HERO達を迅速に運ぶトランスポーターの中で、虎徹とロイズは言い争っていた。

いや、言い争いといつのは正しくない。

「……。わかりました……」

虎徹は奥歯を噛み締め、帽子で目元を隠した。  
言い争いになるまでもなく、虎徹は折れた。

そんな彼を見て、ロイズは溜飲を下げるつもりになつた。  
所詮は飼い慣らされた虎だ。飼い主には逆らえない。  
そう思い込もうとした。

実際はまだ奇妙な敗北感が、ロイズの中でくすぶつっている。

「早くしてくださこよ、おじさん」

「

ロイズが口を開こうとした瞬間、バーナビーが虎徹に話しかけて来た。

自分でも何を言つもつだつたのか、ロイズにも永遠の謎になりそうだつた。

「つむせえ、ちよつとくらい待つてろよ！」

「貴方が僕の三分を無駄にした事を、僕は一生、覚えていてます」

フォローする気がないロイズでも面食らひつよい事を、澄ました顔でさらりと言い放つバーナビーに、虎徹はげんなりとした顔を向ける。

「お前、友達いないだろ……」

「いますよ

「嘘だー!？」

「ええ、一人だけですが、信頼出来る友人が」

「……そいつもお前みたいに性格悪いのか

「失礼ですね。 無駄飯食らいの貴方よりはマシです」

「お前なあ！」

「はいはいはい、そこまで！ 一人とも早くヒーロースーツを着てきて頂戴」

虎徹とバー・ナビー。

どういう訳かわからないが、やたら仲の悪い二人の上司になつた事を、ロイズは後悔し始めていた。

頭を抱えたくなる気分をロイズは無理矢理、ねじ伏せる。

「斎藤くん、あとは任せたよー。」

「…………」

「うおっ、びっくりしたーー！」

「だからともなく、ぬつと虎徹の背後より顔を出した白衣を着た色黒の小男。」

頭のてつぺんぱつるつと輝き、眼鏡の下の目は虎徹をじろじろと露骨に観察している。

「あ、ども。ワイルドタイガーっす」

「…………」

「……ワイルドタイガーです」

「…………」

「ワーアールードーターイーガーでーす！」

「ああ、斎藤くんと話す時は顔を近付けて。凄く声小さいから」

メカニックとしての腕はシュテルンビルトで五指に入るほどだが、

「マニアケーション能力の欠如つぱりも半端な物ではない。」

そこを上手く利用し、前の会社から斎藤をロイズが引き抜いて来たのだ。

その時は我ながらいい仕事をしたと思つていた。

しかし、

「はあ！？ 前のスースークソスースーって何ですかー？ めちゃくちや格好いいじゃ無いですかー！」

「フツ……」

食つてかかる虎徹を鼻で笑う斎藤と、

「やれやれ……」

スタイリッシュに眼鏡の位置を直すバーナビーを見て、

「……不安だ」

胃薬の手配をしておこうとロイズは思つた。  
この連中を纏めるのは骨が折れそうだ。

『いい？ 今日はバーナビーのお披露目だから、スカイハイとあんた達二人だけよ。 あとタイガー、貴方はバーナビーのフォロー。いいわね？』

『腕に着いてるのは、ワイルドシユートだ！ 前にお前が使つていたクソスーツの数十倍のワイヤー強度があるぞ！』

『返事をしなさい、タイガー！』

『わかったか？ わかったな！』

「だあああああ！ うるせえー！ 大体、齊藤さん普通に喋れるんじゃないですか！？』

新しいスーツを着込んだ虎徹にアニメスと齊藤から同時に通信が入つて来る。

通信機越しになると声の大きくなる齊藤、元々声のでかいアニメスの声がワイルドタイガーのヘルメットの中にぐわんぐわんと響く。すでに銀行前にスタンバイしているというのに、どたばたしているワイルドタイガーを見てロイズはため息を吐いた。

「すまないね、バーナビー君」

「いえ、最初からあの人を当てにしていませんから」

さらりと返すバーナビーに緊張の色は見えない。

マーベリックの秘蔵っ子という触れ込みで連れて来られたバーナビーは訓練では、それに相応しい結果を出し続けている。

しかし、それならもう少しコミュニケーションについて教えておいて欲しかった、とロイズは思つ。

『ああもうー もう三十秒前になっちゃったじゃない！ スカイハイがシャッターを吹き飛ばしたら、ゴーよー！』

「へいへい……」

「任せてください」

「ここで何か言つべだらうか、とロイズはしばし迷い、

「一人とも我が社のために頑張つて来てくれー！」

「この人が僕の足を引っ張らないようここ祈つていてください」

「てめ、このやつ……！」

火に油を注いだ。

そして、そんなぐだぐだとやつている一人を相手にする事なく、  
彼が動き出す。

『今期、初めての出動ながら、その風は全ての悪を逃さない！  
シユテルンビルト市民を守るキングオブヒーロー！ その名はあ  
あああああー！』

「どうづー！」

ビルの上から飛び降りる人影。

人生に疲れたサラリーマンか？

いや、その姿に一切の惰気は感じられない。

銀の兜にコートをたなびかせて、彼がシユテルンビルトの空を支

配する。

彼より高き者は無し。  
その名を、

「スカイハイ！」

両の手の間に集まる風は、まさに悪を吹き飛ばす威風。

『おーっと！ キングオブヒーローは今年も絶好調！ 鋼鉄製のシャツターを一発ノックアウトだー！』

凶悪犯罪から守るために、シユテルンビルトの銀行は軒並みシャツターが分厚く出来ている。

しかし、スカイハイの風を操るNEXTの前では薄紙に過ぎない。凄まじい音を立てながら、大穴を開けて吹き飛ばされる。

「行くぜ、バニー！」

「僕に命令しないでください。 つてちょっと待ってください、バニーって僕の事ですか！？」

「おひ、お耳が長いバニーちゃんってね！」

『はやーー！ ハンドレッドパワーを発動したHEROコンビが、疾風の如く銀行内に突入うううううううううううううう！』

「僕はバニーじゃない！ バーナビーです！」

赤と白の装甲。 バーナビーのスタイリッシュな全面に出した  
スースのデザイン。

両の目が赤く輝き、悪党達はたちまちバーナビーの眼光にひれ伏す事だらう。

「僕はバーーじゃない！　バーナビーです！」

縁と白の装甲。　ワイルドタイガーの精悍さを全面に出したデザインは悪党達に恐怖を……頭の横に手を当て、兎の真似をしていなければ「見えるだらう」。

「そんな言い方はしていない！」

「そんな言い方はしていない！」

ワイルドタイガーはわざとおちやらけた声を出し、バーナビーを煽る。

『どうした、タイガー＆バーナビー！？　仲間割れかああああああああ！？』

外でモニターを見ていたロイズは退職金がいくら出るか計算を始めた。

貯金と合わせれば恐らく故郷に帰つて、小さな喫茶店へりこは出せるだらう。

『あなた達、眞面目にやりなさい！』

「ちつ、怒り切っちゃつたぜ」

「貴方のせいですか？？」

アニメスの怒声を聞き流しながら、一人は会話を続ける。

「よし、じゃあいひよひせ。 犯人を多く逮捕した方が相手の命令を一つ聞く

「僕が勝つたら、ちやんとバーナビーと呼んでもらいますからね」

「いいぜ、なら」

「スタートです。」

「あ、汚ねえ！」

赤い流星と、少し遅れて緑の流星が夜の銀行に輝く。

「つかむ……マジやべえ。 HEROマジやべえ」

「……近くで見ると、こんなにも凄いものなのか

壁や天井すら足場として、縦横無尽に跳ね回るワイルドタイガーバーナビーは強盗犯達を描写の必要も無いほど、一瞬の間に片付ける。

残るのは田中と佐藤だけという有様だ。しかし、革命しなければならないのだ。

絶対的な強者に人は立ち向かわなければならぬ。

佐藤の魂は音を立てて、燃え上がる。

「よつしゃあ、三人逮捕！」

「くつ……！」

出遅れたワイルドタイガーだったが、固まっていた三人を上手く逮捕していた。

焦るバーナビーと、カウンターに隠れていた一人の目が合った。

「こ」の一人を逮捕すれば……！

「ありがとうござりますううううううー！」

「なつ」

「実はこ」の男達に脅されて、無理矢理に従わされてたんですね……」

覆面を脱いで、その美貌を涙で濡らす佐藤は、見よがしよつては少女に見えるほど可憐だ。

そんな彼が涙を流せば、どうか？

普通の者なら、それだけで騙されてしまうだらう。

「知りません。僕のポイントになつてください」

しかし、バーナビーには通じない。

怒りと虎徹に負っている屈辱の前に、理屈と理性を吹き飛ばして

いるのだ。

「ちよつ、ちよつと待ってください！　自首しますから！」

計算が崩れた。

田中はそう思いながらも、弱々しい擬態をやめるわけにもいかない。

「駄目です」

バーナビーの冷静な、冷静なふりをした声。　振り上げられる拳。

「あわわわわわ……」

せめて、情けない声を上げる田中だけでも庇わなければ、と佐藤は考えた。

革命闘士が弾圧されるのは当然だが、その覚悟も無い田中を傷付けるのは本意ではない。

田中を抱き寄せるように佐藤は動いた。

「待てよ」

だが、バーナビーの拳は彼らに振り下ろされた事は無かった。

「……邪魔しないでください」

ワイルドタイガーがバーナビーの腕を掴む。

その力はまるで万力で締め上げられているようで、スース越しだというのにバーナビーに痛みを与えた。

「抵抗しない相手を殴つたら、お前はHEROじゃなくなる」

「どうせ、貴方が負けそつだから言つてるんでしょう。」

「なら俺の負けでいい。 だけど、HEROはそれだけはしちゃいけない」

ハンドレッドパワーだ。

同じ百倍の身体能力だといつのに、バーナビーの腕はぴくとも動かせない。

「……離してください！」

「バニー！」

「殴りませんよ。」そのまま警察に引き渡します。……それでいいでしょ？』

不貞腐れたような、しかし力を失つた声を聞いてワイルドタイガーは掴んでいた腕を放した。

「ああ、それで……ってあれ？」

視線を助けたはずの二人に向けると、

「……どこに行つたんでしょうか？」

綺麗さつぱり消えていた。

恐らく外を囲む警察に、捕まつているだろ？と考へ、二人は彼らの事を忘れた。

「……とにかく俺の負けか。悪かつたな、からかつたりして」

頭を搔き、明後日の方向を向いて謝るワイルドタイガー。  
これでも本人は一応、年長者として譲つてやらなければ……と考  
えているが、誰がどう見ても子供が謝っているようなひどい態度だ。

「……引き分けです」

「は？」

「引き分けです！」

「は？」

「何がおかしいんですか！ 帰りますよ、おじさん」

「待てよ、バニー。人質を助ける所までHEROの仕事だぜ！」

「……っ！ わかつてます！」

「ふはははは、さすが我輩！仲間割れの瞬間を見逃さず、逃げ出すとは凡百の者には出来まい！」

「……なあ、コンビー寄つていいか？下着買いたいんだけど」

シユテルンビルトの闇の中に一人の革命鬪士が消えた。  
彼らが大輪の惡の華を咲かせるのか、燃え盛る革命の炎となるか。  
それはまだ、誰にもわからなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5406v/>

---

TIGER & BARNABY

2011年9月1日06時20分発行